【原著論文】女子大学生版父親からのかかわりイメージ尺度の作成

林　　友理子
金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程前期過程

A scale to measure father–daughter relationship for Japanese female university students

Yuriko Hayashi
Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

This study develops a scale to measure relationships between fathers and daughters, particularly focusing on how daughters recognize the parenting style of their fathers. Based on previous studies such as those of Sakai (2004) and Tanii & Kamiji (1993), 20 items were selected. In all, 120 Japanese female university students (mean age = 21.6 years) responded to the questionnaire, and the responses were analyzed using exploratory factor analysis. Based on the results of the analysis, 11 items were selected, and the validity of the factor structure was confirmed using confirmatory factor analysis. The items were groups into three factors: “acceptance, respect” “education for social skills,” and “over parenting”. The fit indexes of the model were found to be good, and the scale was found to be useful for future studies of family psychology.

Keywords：father–daughter relationship, parenting style, female university students

要　約

本研究では，父娘関係，特に娘の父親とのかかわりに対する認知に焦点を当て，それを測定するための尺度を作成することを目的とする。酒井（2004）や谷井・上地（1993）などの先行研究に基づいて，20項目の質問項目を作成した。次に，女子大学生120名（平均年齢= 21.6歳）に質問紙への回答を求め，探索的因子分析を用いて回答を分析した。分析結果に基づき項目を精査し，11項目を選択し，確証的因子分析を用いて因子構造の妥当性を確認した。その結果，「承認・尊重」，「社会に向けての教育」，「過干渉」の三因子が抽出された。この結果を元に，全11項目から成る「女子大学生版父親からのかかわりイメージ尺度」とした。モデルの適合度は高く，本尺度は将来の家族心理学研究に有用であることが明らかとなった。

キーワード：父娘関係，養育態度，女子大学生

Ⅰ．問題と目的

近年，父親の職場への長時間拘束や，妻の有職化に伴う父親の役割の変容などの問題が注目されている。尾形（2006）は，女性の社会参画が進み，それにともない共働き家庭の増加も進んでいるため，父親は今まで以上に母親と協力し合い，育児・家事を全般に行えるようになることが必要であると指摘している。つまり，家庭における子育ては，社会情勢の変化によって「母親中心」のといった従来のあり方から，父親も含めた「共にやる」方向に進んできている（高橋，1987）。そのため，これからは父親も母親もともに働く家庭では，子育ては両親の役割となり，子どもは父からも母からも世話を受け，見守られて育つ複数養育（Multiple mothering）を受けることになると考えられる。にもかかわらず，親子関係に関する研究は，母と子に焦点を当てたものが大半であり，父子関係の理論は少ない。柏木（1993）は，フロイト，そのほか愛着理論にかかわる研究者たちは，“子どもの発達に影響するのは母親で，父親はそれほど重要ではない”という仮定を暗黙のうちに持っていたため，父親を無視してきたと述べている。

子育てにおける，父親の重要性が注目されたきっかけは，父親不在家庭の子どもが，両親のいる家庭の子どもに比べて，いろいろな面で発達に遅れや問題のあることが見出されたことだった（柏木，1993）。たとえばノルウェーの船員の家族について，父親が長期に不在であることから，男の子はおとなしく，活動性や攻撃性が低くなると明らかにされ（Lynn & Sawrey，1959），兵役による父親の不在の影響としては，不安傾向が強く，女性の教師に対する依存傾向が強く，男の子らしさが乏しくなると指摘している（Nash，1965）。日米での比較研究においても，とくに父不在の事例で知的発達でのマイナスの影響が認められている（東ら，1981）。ここから，父親と母親は子どもにとって全く異なる役割を果たしているため，双方からの研究が必要であると考えられる。

河合（2004）は，父親・母親の役割について，「包含する」，「切断する」という考えを述べた。母性原理は「包含する」ことを主な機能とし，全てを包み込んでしまい，すべてのものが絶対的な平等性をもつものである。対して父性原理は，母子の一体性を破ったように「切断する」機能にその特性をもっており，それは，すべてのものを切断し分割する。このような，いわば相対立する二つの原理は，もちろん片方のみでは不完全であり，相補ってこそ有効なものであるとしたが，実際にはどちらか一方が優勢で，片方が抑圧されたり，無視されたりする状況になっていることが多い。一方，父親の役割についてParson（1954）は，父親と母親について「道具的（Instrumental）」，「表出的（Expressive）」という，二つの概念を考えた。「道具的」とは，新しい目標を設定し，みんなを駆り立てようとする立場を示すものであり，父親としてのあり方（父性）を示している。「表出的」とは，目標に向かって活動している時に，全員が意気投合し，進んでいけるようにグループ内で生じる葛藤，問題に対してグループ内のメンバーの意見を聞いたり，調整したりなど，各メンバー内の調整をきめこまかく心配りする，母親としての立場（母性）を示している。対して猪野・堀江（1994）は，父親も母親も職業生活をするようになっている現在，Parsonの伝統的な性別役割観が崩れていると述べており，道具的役割と表面的役割をどう分け合うのか，新たな父親役割母親役割を早急に作るべきと述べている。

そのため近年，父親の存在による，家族関係への心理的影響についての指摘は増えている。数井ら（1996）は，子の愛着の安定性には，夫婦関係の調和性が重要であり，母親の心理的状態や子どもの行動・態度は，夫との関係のありようと密接に関連していると指摘しており，子どもの心理的状態を研究する上で母親ばかりでなく父親（夫）との相互作用・関係を考慮にいれなければならないと報告している。また尾形（2011）は，父親が育児に参加しないと，母親一人に親役割が過重負担となり，結果母親の過保護，過干渉，母子密着につながると述べている。

その中でも思春期・青年期における娘に対する心理的影響の報告は，いくつもあげられている。春日（2000）は，父娘関係が良好であること，そして娘

が父親から保護されていると感じることが，自分の女性という性を受け入れることを促進させ，また，娘が父親に対して良いイメージを持つほど，父親から情動的な支持を感じるほど，娘のSelf-Esteemは高くなると指摘している。岸本（2011）は，青年期の娘にとっての父親との良い関係は，人間としてバランスのとれた女性への成熟と密接に関係すると指摘している。また大島（2009）は，青年期後期の女子の娘が父親から支持的な関わりを受けたと認識するほど，娘の自己肯定感は高く，抑うつは低く，幸福感は高くなるとしている。よって従来の理論とは異なり，父親の存在は，娘の精神的成長に大きな影響を与えているといえよう。

また，父親からの影響による男女差については，女子は男子よりも父親を愛情深く捉えやすいといわれており（今泉，1979），これを支持する報告も多くある。父親の養育的態度が，娘の友だちを助けるスキルの獲得に影響を与え，間接的に生活充実感を高めるが，息子の場合は父親の養育態度がスキルに影響を与えないという報告もある（竹嶋ら，2005）。また，男子大学生が「生きていることの厳しさを教えてくれる人」「悩みの相談相手になってくれる人」を求めている一方で，女子大学生は，「幸せを考えてくれる人」と「進路の決定に影響与える人」という，相談相手ではなく見守り，導いてくれる役割を求めている（猪野・堀江, 1994）。田村・井上（2005）は，青年期の女性は男性よりも，父親養育態度による影響が大きく，父親との間で培われた「自己感」が，青年期に他者との関係の中でも繰り返される可能性を示唆し，青年期女性にとって父親が，自己を照らし返す重要な存在であると示している。このように，娘に対する父親の関わりの影響を調査することが，親子関係の研究において必要であると考えられる。

以上のことから，娘の父親の関わりに対する認知に焦点を当て，その影響を考えることを目的とする。そのために青年期女子を対象に，娘がこれまでの父親からのかかわりをどのように認知し，受け止めているのかを測る，「女子大生版父親からのかかわりイメージ尺度」を作成し，その妥当性を検討する。

Ⅱ．方法

（1）対象

女子大学に所属する大学生120名を対象に調査を行った。平均年齢は21. 6歳（SD＝0.52）であった。

（2）手続き

講義終了後，大学生に質問紙を調査者が配布し，その場で回収した。なお，開始前には，結果は統計的に処理され個人の回答を問題にすることはないこと，調査結果は本論文以外に使用することはないことを調査者から対象者に直接教示し，質問紙は無記名式とした。

酒井（2004）の父親役割尺度の中の「子どもへのかかわり」の因子や，谷井・上地（1993）が作成した親役割尺度（PRAS；Parental Role Assessment Scale）を参考に独自に項目を作成した。項目の作成にあたって，まず著者が先行研究の項目内容などを参考に20項目を作成した。その後，臨床心理学を専攻する大学院生と教員を加え，３名の協議により項目内容の妥当性を検討した。その結果を踏まえ内容を修正し，最終的に20項目を選定した。

評定は，「あてはまらない（１点）」から「あてはまる（５点）」の５件法であった。

Ⅲ．結果

データに欠損があったものを除き，119名分の回答を分析対象とし，得られたデータを対象に探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を実施した（Table1）。因子負荷量.49以上を採用した結果，固有値の減衰傾向（8.02→4.37→1.40→0.87と減少した）と，解釈の可能性に基づいて３因子構造が妥当であると判断された。

第１因子は，「私の甘えたい時には甘えさせてくれる」「進路のことを任せてくれる」「私のことを大切にしてくれる」などの【承認・尊重】，第２因子は，「私が間違っているときに注意してくれる」「社会人としてアドバイスをしてくれる」「社会的常識について教えてくれる」などの【社会に向けての教育】，第３因子は，「私のすることに細かく口を出す」「私のことに関して心配しすぎるところがある」「私の

学校生活や友人関係について細かく聞いてくる」などの【過干渉】と命名した。

次に探索的因子分析で抽出された因子構造をもとに，構造方程式モデリングを用いた確証的因子分析を行った（Figure1）。探索的因子分析の結果から各因子について因子負荷量の高い４項目を選択し，３因子構造モデルを想定した。【過干渉】に関しては，弁別性の問題から項目17を削除した。そのため，【過干渉】のみ３項目で構成した。結果，【承認・尊重】からは項目５・15・18・20，【社会に向けての教育】からは項目１・７・10・16，【過干渉】からは項目６・８・11，全11項目を用いることとなった。各因子のα係数は【承認・尊重】（α＝.92），【社会に向けての教育】（α＝.88），【過干渉】（α＝.78）であり高い信頼性が認められた。なお適合度指標は，CFI＝.968　GFI＝.913，AGFI＝.856，RMSEA＝.074であり，一定の適合度が認められた。

Table1　女子大学生版父親からのかかわりイメージ尺度の探索的因子分析結果

項目番号	項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第１因子	「承認・尊重」			
	20　私の自主性を大切にしてくれる	.920	－.016	－.035
	5　私らしさを認めてくれる	.856	.084	.060
	18　私がしたいことを自由にやらせてくれる	.837	.137	－.162
	15　私の選択を尊重してくれる	.800	.120	－.071
	4　進路のことを任せてくれる	.793	－.226	.010
	13　自分の考えを私に押し付けてこない	.650	.050	.084
	19　私のことを大切にしてくれると思う	.592	.346	.170
	9　私の気持ちを理解してくれる	.537	.415	.014
	3　私が甘えたい時には甘えさせてくれる	.492	.235	.282
第２因子	「社会に向けての教育」			
	7　社会的常識について教えてくれる	－.084	.950	－.115
	16　マナーについて教えてくれる	－.042	.883	－.067
	1　私が間違っているときに注意してくれる	－.136	.878	－.150
	10　社会人としてのアドバイスをしてくれる	.057	.759	－.136
	14　叱るときに，しっかりと叱ってくれる	.048	.757	－.050
	12　私が落ち込んでいるときになぐさめてくれる	.157	.519	.189
第３因子	「過干渉」			
	6　私に対して過干渉である	－.055	－.172	.932
	17　私のことに関して，心配しすぎなところがある	.191	－.090	.855
	11　私の学校生活や友人関係について細かく聞いてくる	.068	.024	.672
	8　私の行動を制限しようとする	－.358	.033	.607
	2　私のすることに細かく口をだす	－.288	.123	.594
	因子間相関			
	Ⅰ		－.148	.518
	Ⅱ			.421

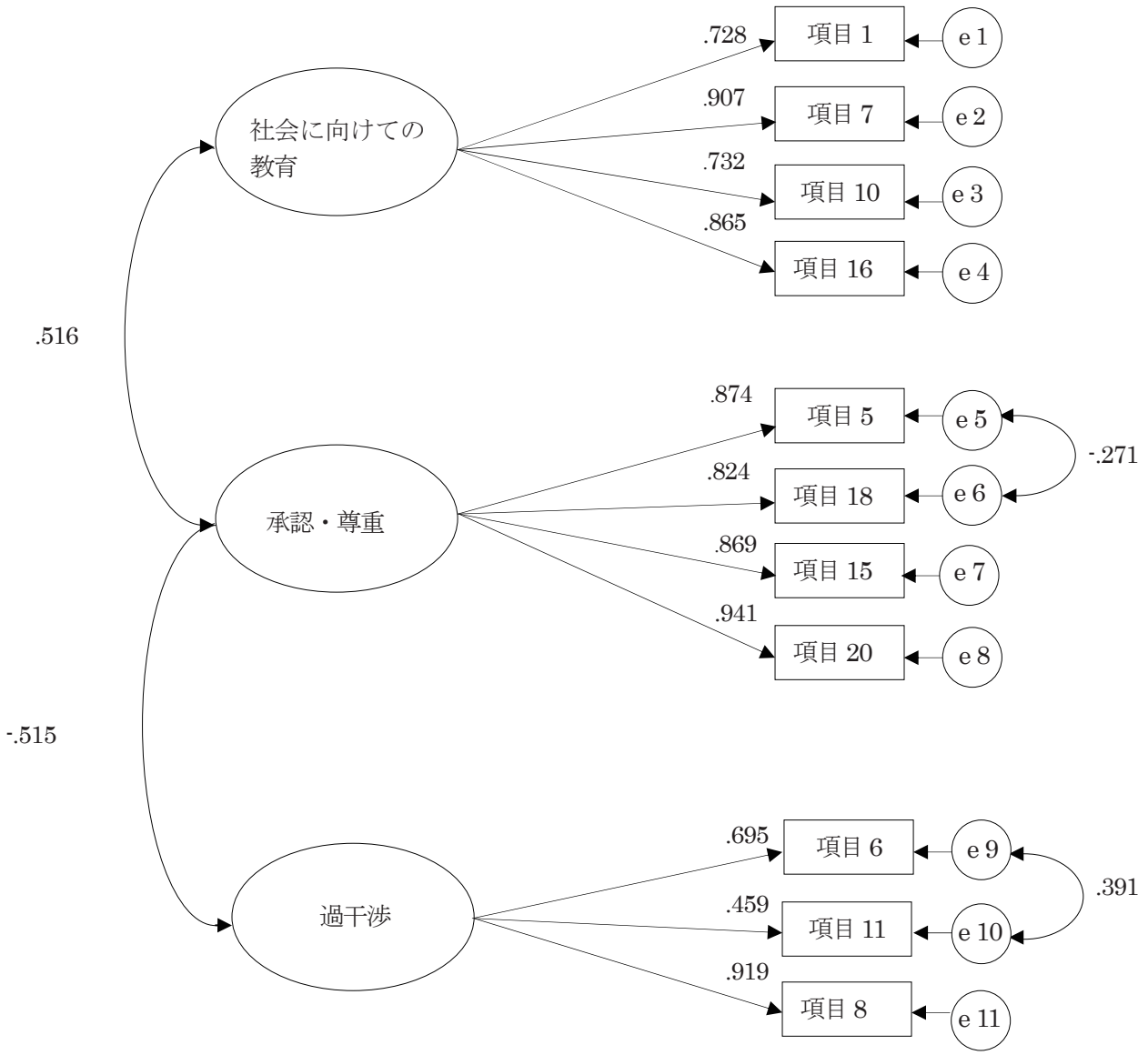

Figure1　女子大学生版父親からのかかわりイメージ尺度の確証的因子分析結果

Ⅳ．考察

本研究では，酒井（2004）が作成した父親役割尺度や，谷井・上地（1993）が作成した親役割尺度をもとに，新たに女子大学生における，「娘が父親からのかかわりをどのように受け止めているのか」を測る尺度を作成した。

因子分析の結果，【承認・尊重】【社会に向けての教育】【過干渉】の３因子構造が妥当であると判断された。各因子のα係数を算出した結果，高い値が見られ，十分な適合度も認められたことから，本尺度は女子大学生の父親からのかかわりをどのように受け止めているのかを測定するための尺度として今後の活用が可能であると考えられる。

この３因子が抽出されたことは，これまでの父子研究の結果を支持することとなった。

「承認・尊重」の重要さについて中丸ら（2010）は，父親から信頼されている，大切にされている，という感覚は時折微風のように娘の近くに呼びかけて，娘にこのままでいいのだという感覚を呼び覚まし，ここぞというcriticalな時に立ち現われて娘を安心させる，と述べている。または許容的養育態度をとる親の子どもは，親の子どもに対して愛情を持って接するような応答的な行動を受けることにより，他者

の行動を敵意のあるものとみなすことが少なくなり，報復的攻撃行動が少なくなるとしている（中道・中澤，2003）。特に父親が子どもに応答し許容的であると，母親が仕事を持っていて子どもがストレスを感じる事があっても，父親の許容的養育態度によって子どものストレスが低下すると述べている。春日（2001a）は，父娘関係の中で「気持ちの通じ合う父親との関係」が娘のこころに影響を与えるとしているが，本調査結果における「承認・尊重」が，これに相当するものであると考えられる。承認・尊重について劉（2012）は，父親の情緒的なサポートが高ければ，子どもが父親に受け入れられていると思うため，情緒的自立が高くなるということを明らかにしている。また，父親からの承認・尊重が少ないと感じる子どもは，多いと感じる子どもより絶望感を経験しやすいという指摘もある（森・堀野，1992）。幼児期の親子関係についての調査でも，父親が受容的な場合，女児は父親をモデルとして向社会性を形成する一方で，母親の態度に関係なく父親が拒否的である場合，女児の攻撃性は高くなるという報告があり（森下，2006），ここから年齢に関係なく父親の承認・尊重する態度が，娘の精神的健康に大きな影響を与えていることが伺える。

また今回，承認・尊重の中には「私の自主性を大切にしてくれる」「私がしたいことを自由にやらせてくれる」「私の選択を尊重してくれる」という，自主性を重んじる項目が多く抽出された。これは思春期から見られえる子どもの独立心の芽生えと関係していると考えられ，Hollingworth（1928）の，「心理的離乳」が女子大学生の中でも起きていると考えられる。Hollingworthは心理的離乳を，「12 ～ 20歳の青年には，家族の監督から離れて一人の独立した人間になろうとする衝動が現れる」と説明している。これに対して末盛（2007）は，心理的離乳が果たされた子どもには，親が子どもに，子ども自身の意見を表現させたり，子どもの自己決定の余地を許容する養育態度が必要となってくると主張している。そしてその接し方が，子どもが自分に責任を持って意思決定を行うことの学習を促進するとしている。落合（1995）は，親子関係の親から見た距離についてを五段階に分けている。第一段階は，親が子どもを手の届く範囲において子どもを抱え込み養っていく時期，第二段階は，親が子どもを目の届く範囲において，親が子を危険から守ろうとする時期，第三段階は，目の届かない所に行ってしまう子どもの成長を，親が遠くで念じている時期，第四段階は，親が手を切り，親子間の距離を大きく取る時期，第五段階は，子は子でありながら親になり，親は親でありながら子になる時期としている。これまでの点を踏まえると，女子大学生は，親との距離が第三段階から第四段階に向かっている最中ではないかと考えられる。つまり，大学生は，心理的に離乳した対等な親子関係に変化していくための途中であるため，父親に対して，自分の精神的自立を認めた行動に重きをおいている時期であると理解される。

次に抽出された「社会に向けての教育」は，心理的にも家族からの自立の準備を迎え，就職活動が目前になってきた大学生を対象としたため，これまで以上に父親を，社会人としての先輩として意識するようになったため，抽出されたと考えられる。小野寺（1984）は，自分の仕事のことや社会情勢などについて話をしてくれる父親とのかかわりの方が，ただ単に親としての行動をとる父親とのかかわりよりも，現在女子大学生である娘から見て，より魅力的であり評価が高くなり，また，娘が父親に対して感じている魅力について，青年期後期の場合，「仕事や政治・経済問題について語り合う」が見出されていると指摘している。さらに，女子には社会のことについても，語っても無駄だという態度を示すのではなく，男女差別なく真剣に話すその態度自体が，娘の性役割観を大きく左右するとしている。父親母親の役割の違いについて松浦ら（2008）は，青年期女子はキャリア選択には同姓として働く母親の姿の影響を受けるが，働くという直接的なイメージや仕事価値観には，父親からの影響が大きいとの報告もある。

以上のことから，近年女性の社会進出が進んだ現代において，父親が娘に社会の規律や労働について伝えることは，重要なかかわりといえよう。なぜ母親ではなく，父親がこの役目を担うのか，それについて河合（2004）は，父親は母子の一体感を破る存在であるため，他者と接してゆくための規範を，父

親を通して知るためであるとし，父親は規範の体現者であると述べている。そのため，娘の仕事への価値観は，父親からの影響によって変わるという報告もされている（松浦ら，2008）。つまり，この結果は娘が父親から離れ一人の大人，社会人として成長するために現れた，成長の一部だと言えるだろう。そのために，確証的因子分析では「叱るときに，しっかりと叱ってくれる」「私が落ち込んでいるときになぐさめてくれる」という児童期に父親に求めていたかかわりが抽出されなかったと思われる。以上のことから，女子大学生は就職活動を目前に控えていたり，最中にある時期であるため，父親を家族という存在だけでなく，社会人の先輩として意識し，助言を求めるかかわりが見られるようになると結論できる。

さらに，「過干渉」についても，これまでの父娘研究の中で注目されてきた。これまで中丸ら（2010）や春日（2001ｂ）が作成した父娘関係尺度の中にも，「過干渉」は含まれている。父親の「過干渉」について，前川（2005）は，「父親の過干渉傾向」の強さは，青年期娘の「体型不安」を弱めるという指摘をしており，娘がネガティブな経験をしたり，リスクを負うような状況にさらされたりする場合には，異性である父親の過保護で過干渉な養育態度が，不適応な結果を中和させる働きがあるとしている。竹嶋ら（2005）は，父親が拒否的であると娘の生活充実感が低くなり，過保護であれば生活充実感に正の影響を与えると述べている。従来摂食障害とは，母子間の問題によって引き起こされるといわれてきたが，嘉手納ら（2004）は，父親との親子関係をやや過保護と捉えている娘ほど，摂食障害傾向が低くなると報告している。このように父娘間の関係において，父親からの過干渉は，娘にとって精神的安定に繋がるものとされている。これは，初めて出会う他人，異性という存在である父親から心配されることで，自分には心配される価値があると感じ，満たされた気持ちが生じるためではないかと思われる。しかし一方で，「温かな関心を向けられず干渉されている」と感じる娘は，「温かな関心を向けられ干渉されていない」と感じる娘よりも，他者に対して一貫した自己像と持ちにくく（田村・井上，2005），父親は，普段からの信頼関係がなければ，心配する態度を持っても，娘に肯定的な影響を与えることは難しいと思われる。信頼関係を持っている娘は，父親からのかかわりを「心配してくれる存在」と捉え，信頼関係を持っていない娘は，「鬱陶しい存在」と捉えるのだと考えられる。このように，父親の干渉により影響は良くも悪くも働くが，田村ら（2005）はどのような種類のものであれ，関心すらない，無視をされることは，娘の自我同一性の確立を阻むと指摘しており，父娘間の研究において「過干渉」と外すことができないことが理解できる。

以上のことから，本尺度はこれまでの先行研究の結果を支持するものであり，女子大学生の娘が，父親からのかかわりをどのように受け止めているのかを測る尺度として，今後の活用が可能であると考えられる。本尺度を利用して，他の心理的特性などの関連を検討していきたい。

引用文献

東洋・柏木恵子・ヘス，R. D.(1981)．母親の態度・行動と子どもの知的発達―日米比較研究　東京大学出版会

Hollingworth, L.S.(1928)．*The psychology of the adolescent* .New York: D Appleton Century Company.

今泉信人（1979）．女子学生の父親像と母親像の研究　日本教育心理学会総会発表論文集　21，486-487.

猪野郁子・堀江鈴子（1994）．両親像について（2）―大学生の捉える父親の現実像と理想像―　島根大学教育学部紀要，28，9-15.

嘉手納悟・今井章・嶋崎裕志（2004）．女子学生における親子関係と摂食障害傾向　健康心理学研究　17，2，32-41.

柏木恵子（編）（1993）．父親の発達心理学―父性の現在とその周辺　川島書店

春日由美（2000）．日本における父娘関係研究の展望―娘にとっての父親―　九州大学心理学研究　1，157-171.

春日由美（2001a）．父娘関係と女子青年の自己受容感―大学生女子を対象として―　日本青年心理学会大会発表論文集　9，9-10.

春日由美（2001b）．「娘の心の中の父親像・父娘関係」尺度作成の試み　日本教育心理学会総会発表論文集　43，609.

河合隼雄（2004）家族関係を考える　講談社

数井みゆき・無藤隆・園田菜摘（1996）．子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について　発達心理学研究　7，1，31-40.

岸本小百合（2011）．父娘関係が娘の男性性に及ぼす影響　女性学評論　25，279-281.

劉楠（2012）．父親の養育行動が思春期の子どもの情緒と生活面での自立に与える影響―中国山西省の調査から―

Proceedings：格差センシティブな人間発達科学の創成=Science of human development for restructuring the “gap widening society” 20 公募研究成果論文集 Grant-In-Aid Research Awards, 41-51.
Lynn, D. B., & Sawrey, W. L.（1959）. The effect of father-absence on Norwegian boys and girls. *Journal Abnormal and Social Psychology* 59, 258-262.
前川浩子（2005）. 青年期女子の体重・体型へのこだわりに影響を及ぼす要因―親の養育行動と社会的要因からの検討 パーソナリティ研究 13, 2, 129-142.
松浦素子・菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・天羽幸子・詫摩武俊（2008）. 家族機能が娘の仕事に対する価値観に及ぼす世代間伝達の検討：父親・母親・青年期の娘の3者の分析から 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 17, 242-243.
森和代・堀野緑（1992）. 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究 40, 402-410.
森下正康（2006）. 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング（2）―父母の態度パターンによる分析― 和歌山大学教育学部紀要 56, 33-41.
中丸澄子・篠原稚恵・坂本萌・耒島 千穂・上杉美和（2010）. 娘の自己受容の源泉としての父親―3要因仮説の検討と父娘関係尺度構成の試み― 広島文教女子大学心理臨床研究 1, 12-20.
中道圭人・中澤潤（2003）. 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要 51, 173-179
Nash, J.（1965）.The father in contemporary culture and current psychological literature. *Child Development* 36, 261-297.
落合良行（1995）. 心理的離乳への５段階過程仮説 筑波大学心理学研究 17, 51-59.
尾形和男（編）（2006）. 家族のかかわりから考える生涯発達心理学 北大路書房
尾形和男（編）（2011）. 父親の心理学 北大路書房
小野寺敦子（1984）. 娘からみた父親の魅力 心理学研究 55, 289-295.
大島聖美（2009）. 妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響 発達心理学研究 20, 351-361.
Parson, T.（1954）. The father symbol: An appraisal in the light of psychoanalytic and sociological theory. In L. Bryson, L. Kinkelstein, R .Makron（Eds.）, *Symbol and Values*. New York :Harper &Row.
酒井彩子（2004）. 今日の課程における父親の関わりと父親役割尺度の作成 人間文化論叢 7, 461-472.
末盛慶（2007）. 思春期の子どもに対する親の養育行動に関する先行研究の概観―親の養育行動の次元構成および子どもに与える影響について― 日本福祉大学社会福祉論集 117, 51-71.
高橋宗（1987）. 現代の父親像（１）―父親に対する調査データーを手がかりとして 聖隷学園聖泉短期大学人文・社会科学論集 1, 103-124.
竹嶋飛鳥・戸田真弓・青木多寿子・谷口弘一（2005）. 親の養育態度と子どもの社会的スキル，生活充実感との関係（1）―中学生での父親の養育態度の影響の男女差― 日本教育心理学会総会発表論文集 47, 125.
田村和子・井上果子（2005）. 青年期における境界例心性と養育態度の関連について 日本精神衛生学会誌 20, 73-87.
谷井淳一・上地安昭（1993）. 中・高生の親の自己評価による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究 26, 113-122.